

去る9月20日から1週間たらずだったが、久しぶりに九州へ出かけた。新幹線の「ひかり」号で往復した。飛行機の方が安くて速くて楽なのだが、出張ではないので1時間半より6時間半を選んだ。空を行くより多少は風情があるし、ゆっくり酒が飲める。デッサンの彩色が出来る。また、旅は日常生活の中の一つの虚構だとすれば、これに浸る時間や機会が飛行機よりはるかに多いからである。

飲みながら彩色するにはテーブルの広いグリーン車の座席がいい。不景気のせいかな厭な客が一人もいなかった。しかも、博多まで隣は空席で、悠々と飲み読み描くことができた。帰路もそうだった。旅の目的は久留米に住む恩人の病氣見舞、石橋美術館に陳列された大作『放牧二馬』を観ること、柳川と阿蘇を素描するためだった。

もう三ヶ月も経つというのに、『放牧二馬』の余韻が頭から消えない。何だか、身体全体に染みついているようだ。

昭和48年春から62年春までの14年間、私は毎月久留米へ出張した。新しい研究所の建設とそのフォローのためだった。このとき、美術に詳しい中学以来の親友Tから石橋美術館を知らされた。ここで、偶然にも坂本繁二郎の『放牧二馬』に巡り合えたのである。三十年前から17年前までの間のことである。

会場の一番奥にあった。『放牧三馬』と並んでいた。『三馬』が50号で、これよりひとまわり大きいから70号か80号位であろうか。阿蘇の高原に違いない。空が広い。二馬が阿蘇の草原と空と一体になっている。微塵も俗気がない。悠々としている。画全体が無窮であり、幽玄である。自由自在で形式がない。何処にも借りてきたものがない。こんな事を考えていたら、会場の若い女の監視員が声をかけてくれた。

「椅子をお持ちしましょうか」——時計を見たらもう20分経っていた。今度の旅には杖を持って来なかったので脚が硬直しかけていた。彼女は一人掛けの椅子を持ってきてくれた。3メートル程のところに据えてもらった。実に有難かった。お陰で一時間余り『二馬』と対峙することができた。スケッチ・ブックを取り出して、次々に浮かんでくる思いをメモした。清澄、気品、無雑、脱俗の世界。根本の所に雄大なものがある。作者は一日の中で一番身心の高揚したときに描き継いだに違いない。だが、瞬時に描きあげた作品に見える。瞬間の情景を捕えている。

対峙している内に、こちらの身も心も画面の中に吸込まれて行くような気になる。己が

無い。虚無の世界だ。幾日も幾日もかけて、持てるもののすべてを搾りだした画である。技を極めあげた末、惜し気もなくこれを捨て切っている。静かな尊さが迫ってくる。ちゃんとした馬だが、観ている中に馬でなくなっていく。作者の精神が見えてこない。作者がそのまま馬になったかのような不思議な画である。

一日おいて、また観に行った。逢いに行ったという方が正しい。この日は、昼食時で女子監視員はいなかった。全室を見廻っている警備員のような屈強な男の監視員だけだった。始めから椅子を借りた。運んではくれない。大層重い椅子だった。また、スケッチ・ブックに感想の続きを書いた。一昨日もそうだったが、この日も祭日なのに私の前や後を過ぎった客は4人か5人しかいなかった。しんと静まり返った時間だった。

『二馬』と2日にわたり合計2時間半睨めっこをした。対話をした。『三馬』もいいが、『二馬』は更にいい。『三馬』の方はいささかではあるが、形が眼ににつく。この後、会場の面をゆっくりと観て帰った。『二馬』にのめり込んだ後は、青木繁も藤島武二も黒田清輝も佐伯裕三も皆、才気が気になる画だった。

翌日は柳川と阿蘇を訪ねた。若き旧友H君が運転してくれた。柳川は昔の面影を一部に止めていたが随分変っていた。妻籠や馬籠の態様を企む役人や住民が県にも町にも村にもいなかったのだろう。それでも気に入った場所があったので何点か素描した。

阿蘇はほとんど変っていなかった。車から出ると風もあって大変寒かった。手がかじかんで来た。早描き、走描きを何枚もした。噴火口を遠望する景色だった。放牧馬はいなかった。1日おいて、久留米生まれのこれも若い友人のK君に耳納山と筑後川を案内してもらった。山系から見る筑後川は霧雨に煙って見えなかったが、漱石の『草枕』のモデルになった耳納山に登り、記念碑のあるところで車から降り「山路を登りながら」を偲んだ。

友人の車は腰の高い4輪駆動だったので、薄を押し分け小川を渡り大小の河原石を蹴散らして川岸まで下りることが出来た。そのため、堤やら人の歩いて行ける場所からは描けない風景が描けた。

帰路の新幹線では、これらのデッサンにすべて彩色した。20枚足らずの小品だが、来年の第10回展にはこの中から何点かを出品しようと思っている。

(2003-12-10)